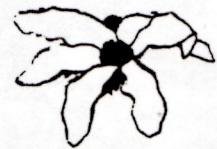


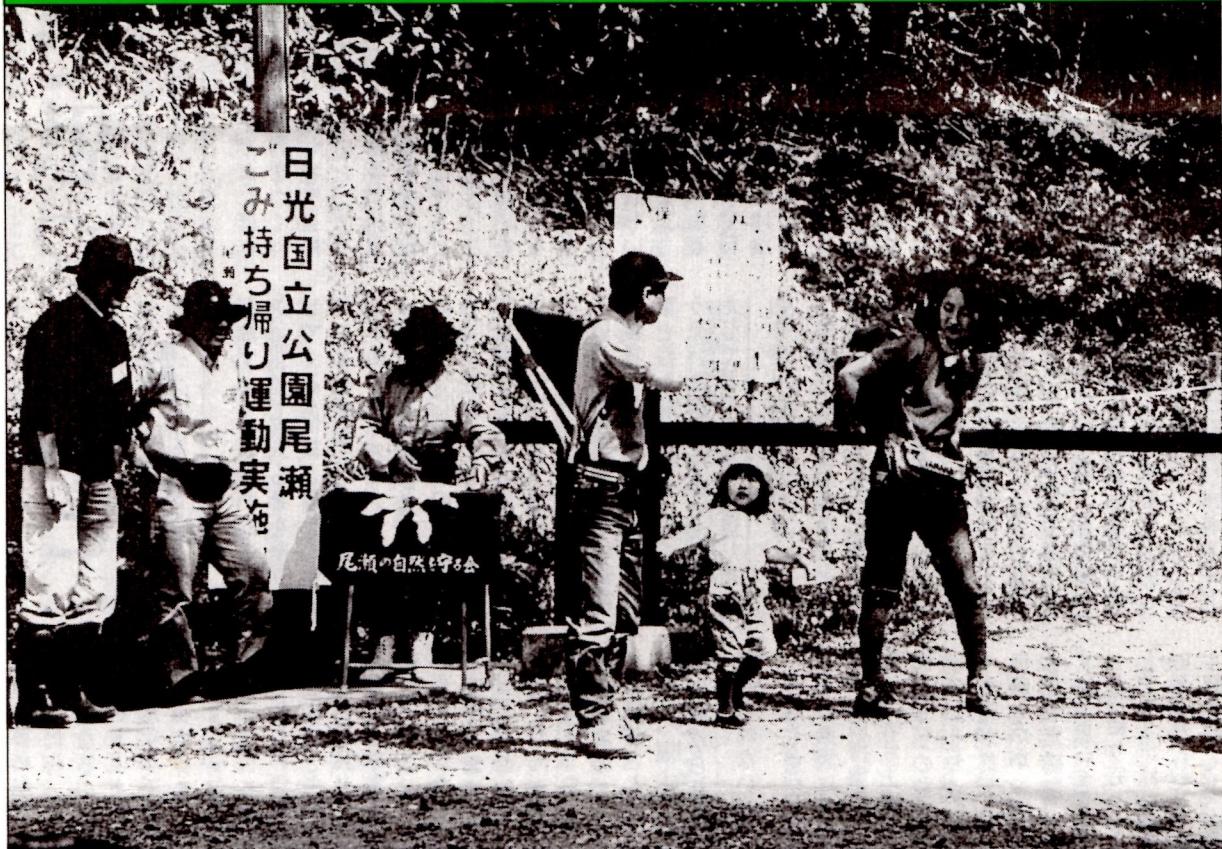
尾瀬の自然



(題字 初代環境庁長官 大石武一氏)

1994年 秋 号

入山者指導—大清水口で



(94.6.5撮影・梅山久夫)

尾瀬の自然を守る会



朝6時にゲートが開く前に観光バスが30台も（7月30日、御池で）

猛暑の今夏は全国的に水不足。尾瀬の湿原も、かなり干上がりに違いない。

七月。一年ぶりの尾瀬は、いくらか乾燥しているようであったが、花たちは約束を守るかのように咲き競い、水不足などまるで知らぬ気であった。

入山指導で思つたこと

福島市・清野共子

一暑い暑い」とタオルがしぼれるほど汗をかき、列をつくつて歩くハイカーたちを尻目に涼しそうにゆれていた。

かはぐんでくる。いつの間にか、同行の大人も身を乗り出してくる。信頼と尊敬のマナザシ？を感じると、自然に自信が湧いてくる。

が待つて いるかの ような ま
ぎらわしい 説明 不足 の パンフ
や 案内書。それが 原因 とは 言
わないので、毎年、お年寄り
の 負傷者や 事故さわぎ が 必ず
起る。

入山指導の課題に

このケースは、生命にかかるほどのことではなかつたが、とても腹が立つた出来事として忘れられない。

が多い。運よくわれわれの仲間に助けられた人は幸運だ。

観光会社は、客を募集して運んでくるだけ。バスを下りたらご自由に、と帰りの時間ぞナ指定して案内もしない。

いろいろな先輩たちの解説を参考にしながら、「自分の言葉と持ち味で伝えよう」—そう思いながら今年で五年。果たしてどのくらい上達したか、お年寄りは尾瀬が好き

今でもあれあれ

れた場所に黙って数時間立っていたこともある。難しい質問など答えられないで、ゴミ拾いに専念したり、なるべく人の少ない方へ歩いて行つたりと、われながら情けなくなつた。

しかし、ワッペンを付けているのだから「知りません」ですませるわけにはいかない。とにかく図鑑や参考書を読みあさり、言葉だけでも格好よく出していく

るようすに、尾瀬のあれこれを見たすら頭に詰め込んだ。

先輩たちの解説参考に

声を掛けやすかったのは子供である。一、三の花や昆虫の説明をすると、すごく興味をもつてくれる。そうなると話

観光会社の美しいポスター

や案内書に魅せられて、「いちど尾瀬に行つてみよう」という気になるのだろう。尾瀬が一千四百メートルを超える山岳地帯だなんてまったく知らぬにやつてくる。バスを下りたら、もうそこに沼が見え、湿原が待つてゐるかのような、まぎらわしい説明不足のパンフレタ内書。それが原因とは言わないけれど、毎年、お年寄りの負傷者や事故さわぎが必ず起ころる。

歩き廻れない山道で足をネンザするおばさん。強行スケジュールのため、疲れて気分が悪くなつたおばあちゃん。転んですりむいたなんていうのは毎度のことと、ツアーバスの団体さんには大人の迷子が多い。運よくわれわれの仲間に助けられた人は幸運だ。忘れられない出来事

今でも忘れられない、くすぶりの原因になつたことがある。入山指導終了時間も近くなり、引き上げようとした山林に向う私の前を、ふらふら歩いているおじいさんがいた。

木道が終わり、最後の上りに差しかかつて「大丈夫かな」と思った瞬間、木の根につまづいて思いきり転倒してしまった。走り寄つて抱き起こすと「もう歩けない」と、ぜいぜいしながら言う。

連れてくる前に、もう少し親切な説明ぐらいできないものか。高齢化社会の到来で、観光会社のお客は中高年者が増えんだろう。ポスターばかり立派にしないで、詳しい地図や親切な説明書を作つてほしい。今後の入山指導の課題として、観光会社へハイカー募集要領の見直しを申し入れてみてはどうか。あわただしい尾瀬の旅であつても、だれもが美しく楽しかった、と思い出

二二五

で一泊二日の団体バスに参加した。昨夜は小屋泊り。今朝から沼一周のコースをたどって帰途についたところだった。九十歳になるという。そこへ娘が戻ってきて「早く歩かないとバスが出てしまう」と急がせる。休ませないと無理だと説明しても、バスの時間ばかり気にして、娘は「早く早く」とイライラ。ついに親子ゲンカまで始まる。私が連絡を引き受けて、沼山峠口まで走るはめになつた。

第16回

尾瀨自然保護指導員養成講座

天候は第一日目と第二日目は、ぐもり日々にわか雨といつた程度でした。しかし、第三日目は朝から雨。観天望気、雨天決行を決断しましたが、原に下りてからは尾瀬には珍しい強い雨足となり、アヤメ平では、雨は小止みになつたも

現地講習会を振り返つて

とその構み分け、形成過程を内に秘めた湿原や池塘群の多様性、意外性、国立公園特別保護地区及び特別天然記念物としての現状と問題点等、自然科学から社会科学の分野にまで及ぶ「生きた教材」の豊庫です。そしてこの「生きた教材」が本講習実地検証の核になっているのです。受講の皆さん、「生きた教材」を自分の目で確かめ、肌に感じ、手で触れた実地検証の感動に思いをはせ、折にふれ、テキストを開いて頂ければと思います。

のガスがかかり始め、冷気を感じるほどの厳しい気象状況になりました。しかし一同、標高約四八〇メートルの八木沢道を二時間十五分で登りきるなど、参加意識の高揚裡に、十時間に及ぶロングコースの日程を予定どおり終了することができました。

ついでに、気軽に物が言える
というムードが知らず知らず
のうちに醸成され、このこと
が講習の活性化につながりま
した。四日目（最終日）の討論
では、アヤメ平に関連、「実は、
かつて、私は……」という裏話
まで披露されました。

三泊四日という短い期間で
したが、この間を通じ培われ
た16回生の人間関係が、今後、
さらに豊かなものとなり、こ
れがまた、会の発展に寄与す
ることを折念してやみません。

受講のまとめのレポート

すばらしかつた講習会

とてもすばらしい講習会をありがとうございました。

してもひらひとなどが考えられる。

今、私の頭の中は尾瀬のこと
が八割、家事と育児のこと

守ろうとするならば尾瀬の現状を認めたうえで、地元山小屋までも味方にする必要がある。

一つ知識を増やしていきたい私は人前で話したり、人に話しかけたりすることは苦にならないオバタリアンなのだが、乏しい知識で人に話すのは不安なので、その下地を自分の中にしつかりつくりたいと思っている。

第16回指導員養成講座参加者

氏名	職業	住所
戸塚みどり	主婦	群馬県群馬郡倉渕村三ノ倉830
湯沢正治	自営業	東京都足立区西新井本町4-15-C3-102
荒木由紀子	教員	東京都世田谷区大原1-5-11-202
角田幸一郎	農業	新潟県燕市八王寺1549
喜連寿子	主婦	前橋市大利根町2-14-1
中井恒峯	画家	福島県福島市御山町7-3
深山美子	主婦	千葉市中央区宮崎町531-25
横堀忠	無職	高崎市倉賀野町2783
堀田忠	会社員	横須賀市浦郷町3-73
新井順一	会社員	高崎市石原町2442-1

講師

河内輝明	所沢市東所沢和田2-4-2-104
斎藤陽一	与野市鈴谷7-10-10-405

加藤久晴 (かとう・ひさはる)

1937年東京生まれ。
1960年早大文学部卒業、日本テレビ入社。「追いつめられた少年たち」、「遙かなるガ
ンダーラ」(共著)がある。

尾瀬は病んでいる

3 よみがえれ尾瀬

加藤 久晴

自然保護運動のパイオニア

—「尾瀬の自然を守る会」の活動—

山小屋なのか
旅館なのか

湿原の山小屋地帯に着く。

山小屋の周辺はすでにあぶれたハイ
カーデ人込みができる。

「本日は一晩に二・五人。十晩に二十五人泊まっていた
だきます。支配人」

などと書いた貼り紙が出ている。一晩に二・五人の割合
で詰めこまれるとどうなるのか。横になつて身体を伸ば
して寝ることは絶対にできない。壁ぎわだつたら壁に寄
りかかって座つたまま寝るか、畳のまんなかだつたらリ
ュックの上に頭をもたせかけた姿勢で目を閉じるしかな
い。寝ているうちにまわりの人とぶつかつたり、蹴とば
しあいになつたりする。船倉に放り込まれた魚さながら
である。むろん男女混室。それでもまだ部屋を入れたハイ
カーリーは恵まれ(?)いて、最盛期になると廊下や階
段で寝かされる宿泊客も出てくる。さらに、建物に入れ
ないハイカーリーは、山小屋の軒先にグランドシートを敷い
てシユラフにもぐつて寝る羽目になる。風呂があつて畠が
あるんですから。旅館なみですよ」スタッフの一人で、
尾瀬は初めてだといふ大学山岳部出身者が言う。たしか

完全に山小屋として運営されるなら、客だつて文句は
言わないだろう。山小屋であるはずなのに風呂などたて
るから、客だつて、

「浴衣はないのか?」
などと聞いて、山小屋の従業員に、

「お客様、ここは山小屋ですよ」
などと説教され、気まずい思いをするのである。

山小屋であると主張するなら、尾瀬の山小屋は風呂を
やめるべきなのだ。アルプスの縦走と違つて尾瀬のハイ
カーリーは、小屋泊まりにしてもせいぜい一、二泊なのであ
る。いくら汗をかくといつても我慢できない日数ではな
いはずだし、山歩きに汗はつきものである。なぜ、風呂
をやめることができないのかと山小屋関係者に聞きまわ
ると、きまつて、尾瀬は泥だらけになつて身体が汚れる
場所だからとか、従業員がいるからだと、どうにも歯
切れが悪い。

尾瀬はどこも木造が完全といえないまでも整備されて
いて、むしろ、他の山よりは身体は汚れないくらいであ
る。それに客用風呂をやめるべきだと言つているのであ
る。世論や自然保護関係者が口をすっぱくして風呂廃止

に、最近は北アルプスなどで畠敷きの個室が現れたとい
うものの、普通の山小屋は板張りの大部屋で、風呂はお
ろかシャワーだつてないのがあたりまえである。そういう
ところと比較すると尾瀬の山小屋はどこも畠敷きの個
室が普通になつてるので、まるで旅館である。しかも
山小屋のなかには、パンフで「大浴場完備」と宣伝
しているところさえあるし、部屋には茶を入れたジャー
を置いてあるところもある。旅館へ泊まるつもりで入つ
てくる客が多いのも無理ないのである。
ところが、一步館内に入ると、客は、ここが山小屋で
あることを従業員によつて徹底的に叩きこまれる。つま
り、空部屋があつても相部屋に詰めこまれ、他のテープ
ルが空いていてもそこでゆっくりと食事することを許さ
れず、狭いスペースに押しこめられて窮屈な思いをしな
がら見ず知らずの他人と肩を並べて黙々と箸を運ぶ。そ
して午後八時の消灯。山小屋なら当然なのであるが、客
のほうは旅館だと思っているからどうしても違和感をお
ぼえる。

加藤氏は日本テレビのディレクターとして、長年にわたって尾瀬の自然保護を訴えてきた。本書はテレビ取材の記録をもとに、データを大幅に加えて執筆されたもの。この会報では同書の中から第5章「よみがえれ尾瀬」のみを抜粋して紹介する。
(編集部)

を求めているにもかかわらず、尾瀬の山小屋が頑として風呂をやめないのは別の理由からではないかと考える。つまり、尾瀬の山小屋は風呂を客集めに利用しているのではなかろうか?

現に、下田代十字路にある某山小屋がいつとき風呂をやめたことがある。ところが、とたんに客の入りが悪くなり、その小屋ではまた風呂を再開してしまった。要するに尾瀬の山小屋では風呂に入れることがハイカーのあいだに定着していく、風呂がない山小屋はそれだけで敬遠される。一説によると、くだんの下田代の某山小屋も完全に風呂をやめていたわけではなく、東京の予約センターなどに問い合わせがあると、「汗を流す程度でしたらどうぞ」と答えていたという。

一軒だけでやめてもダメであろう。特別保護区内にある山小屋がいっせいに足並みをそろえてやめる必要がある。

保護の実務は 観光課

『旅館まがい商法』によって、尾瀬の山小屋はどのくらい収益をあげているか?

税務署を恐れてどの小屋も数字を表に出したがらないが、ある小屋では、売店のあがりを合わせると年間三億から五億円の粗収入があるという。小屋の補修費に毎年三〇〇〇万円ほどかけ、人件費やその他の経費を引いても相当な儲けである。

じつさい、ある山小屋の経営者は外車を乗り回すのが趣味で、つぎつぎと高い外車を買い換えるので地元で評判になっていたり、尾瀬の山小屋の儲けを溜めこんで東京・新宿でクラブを開いた経営者もいるという。こうした情報は国税局にも入っていて、仙台国税局が脱税容疑で尾瀬の山小屋のうち何軒かを家宅捜索したこともある。

なお、同じく尾瀬の山小屋移転を求めている自然保護団体は、ほかもある。「日本野鳥の会」群馬県支部と群馬県自然保護連盟である。両団体では一九八一年九月、尾瀬の特別保護地区内の山小屋を地区外に移転するなど

五項目の環境保全対策をふくめた要望書を群馬、新潟、福島の三県や環境庁、関係団体に提出した。両団体は要望書のなかで、

「問題は便利な山小屋が保護地区内にあることなので、これを地区外に出すなどの規制で、人為的に入山者を減らすことが必要」と主張しているが、県側は、

「宿泊施設を持つ山小屋の撤去は、これまでの山小屋の歴史と生活者のこともあり、非常に困難である」と、つづねている。

ちなみに群馬県は、尾瀬の保護行政にあたっているのが、なんと観光課である。尾瀬研究の権威の一人、堀正一群馬大学教授は次のように書いている。

「さて、昭和五十年より環境庁が尾瀬の保護にあたることになつたが、県のこの出先は観光課と環境保全課とである。昭和五十三年には環境保全課は林業経営課の自然保护対策室に縮小された。前者は国立公園、後者は国立公園を除く場所の環境保全という県の事務分担の区分があるので、尾瀬の保護の実務は観光課ということになつた。観光課は尾瀬の保護にむかないと反対してみたが、通じなかつた。」(『尾瀬 私の手帖から』)



日本自然保護協会尾瀬保護小委員会報告書

「尾瀬の自然保護と利用のあり方」

-1-

第6章 尾瀬地域の将来的な保全策の実現のために

(財) 日本自然保護協会(沼田真会長)は、日本の自然環境を健全な生態系として守り、その中で育まれる「生物多様性の豊かさ」の保全を目指して自然保護活動を進めているが、この夏、同協会尾瀬保護小委員会は「尾瀬の自然保護と利用のあり方」と題する報告書をまとめた。日本の代表的な湿原生態系の1つとして高く評価されてきた尾瀬の保全策を提言することは、同協会の目標と一致することから3年間にわたって重ねてきた討議の結果をまとめたもの。ここでは第6章の一部を抜粋して紹介する。

(編集部)

1. 中期計画の策定に向けて

a) 利用者管理のあり方

①入山者入れ込み数のコントロール

前章で検討したように、わが国の自然公園管理にとっての古典的問題ともいえる保護と利用の共存は、生態系保護の重視とともにレジャー活動の拡大と多様化の時代に対応してそれぞれの自然公園の特性、容量(キャリィング・キャパシティ)を前提とした「適地適利用」に向けて再編成の段階に入ったといえる。

その場合、尾瀬の利用のあり方をどこに位置づけるかについてみると、この地域が人為的インパクトを最小にし、自然との接触度の最も密な直接体験型の利用形態に設計されるべきであることは異論のないところであろう。レクリエーション利用ではあっても、地形的条件、アクセスの条件からみて、尾瀬の利用は冬季の山スキーを含む徒歩の自然体験、自然探勝型に限られており、そのためのネイチャートレールやビジターセンターも整備されている。しかし、集団施設とトレールにより利用者の行動が十二分に管理されているにもかかわらず、尾瀬の自然がこれほど危機的な状況の局面に立つに至ったのは、第一に利用者の入山が無制限に行われたからである。

尾瀬がすばらしい自然体験のできる場所であればあるほど、首都圏に近いロケーションにある尾瀬に利用者が集中する傾向は避けられない。尾瀬が特定のナチュラリストや登山家の聖域でないからには、「利用者の数のコントロール」はどうし

ても避けて通れない問題である。

②「オーバーユースと環境容量」の概念

踏みつけによる裸地化、排水の影響による植生の変化などは、オーバーユースによるものという解釈が行われるが、一般的に尾瀬がオーバーユースの状態にあるかどうかを判定する基準は必ずしも一致していない。

当委員会のヒアリングにおいても、利用者が集中するのは5月末から6月のウィークエンドだけであり、このピークが解消できれば問題は解決するという考え方多かった。ピーク時の週末に予約数を減らし、割増し料金を設定して平日への宿泊客のシフトを試みた小屋では、その結果週末客は減少したが、全体の宿泊客数は増加したという事例がある(1991長蔵小屋)。この事例は、山小屋にとては自主的な努力が好ましい結果を生んだと受け取られているが、これでオーバーユース問題が解決したとはいえない。

オーバーユースは、その影響が植生、野生動物などに及んだ場合だけでなく、例えばピーク時の木道の行列もあてはまる。湿原での行列はむろん景観を阻害するが、そのために満足な自然探勝ができないというような心理的要素もその基準となり得る。では、どの程度まで人の姿が視界にある状態なら、許されるのだろうか。

まちまちな定義が行われる原因是、オーバーユース判定の基礎となる地域環境容量(キャリィング・キャパシティ、以下仮に地域容量という)の数値的把握がむずかしいからである。故江山正美教授は、このような入込み容量について「人間標準空間」という概念を出し、人一人の占有空間面積や人ととの間の距離から具体的な収容可能人数の算定を試みている。この研究はまだ実地に応用されるようになっていないが、実験的なプログラムによって科学的な論理の形成が望まれる。

しかしながら、地域容量は数値化したとしても、地域ごとの変異は非常に大きい。尾瀬の場合、もし地域容量に審美的、心理的基準をとり入れるならば、人の密度は「淋しさ」や「孤独」を感じられる状態であるべきかもしれない。(つづく)

白神山地を訪ねて

—指導員研修— 青木安正



登山口で説明する斎藤さん（中央）
（遺産条約登録の1年前に）
（立てられた環境庁の看板）

去る六月十八日（二十日）秋田県山本郡藤里町から白神山地に入った。長い縦横に入り込んでいく多くの林道をぬいながら、ずいぶんと奥に車で入った。“自然とは、いまやこんなにも遠いのだと”を実感させるような道のりである。

なぜかその日晴れ間ものぞき、見はるかすブナの巨大原生林を眼下におさめることができた。

この巨大な緑の山岳地帯（約一万七千ヘクタール）が、ユネスコにより世界自然遺産に指定されたことの感動が、谷から沸き上がってくるガスと共に私たちを包んでいた。一本の林道も見えず、一見の山小屋もない。

話を聞いた人

- 白神山地ブナ原生林を守る会
- 理事長 鎌田孝一氏
- 藤里町総務課長 田代丈正氏

住民の保護運動の成果

三好直子

六月十九日から二十一日まで「尾瀬の自然を守る会指導員研修会『白神山地を訪ねて』」に同行させていただきました。

白石山地は青森県と秋田県にまたかる広大なアシナの原生林を誇り、一九九三年十二月、鹿児島県の尾久島とならび世界遺産条約の登録地となつたところです。

この地域は、これから多くの人が訪ねてくるようになることが予想されるのですが、現在秋田県側は「日本七十二ヶ所」の「十ヶ所」として、

一九九〇年林野庁の森林生態系保護地域に指定されており、その中で保存地区（コアゾーン）と保全地区（バッファゾーン）に区分けされています

保存地区は手つかずの自然を残すところ、保全地区は学術研究や教育活動などローインパクトな活動のみ許されるという考え方です。私には、この区

所は、この保全地域も含まれています。

実際、私自身も遺産登録地の中に入るとはせず、そこからわずかにはずれた小岳に登り、遺産登録地を上から眺めるというかっこになりました。この小岳の頂上から眺めるペノラマは、自然保護あるいは人と自然といったことを考えさせられる、非常に象徴的な様相をしています。眼前に遺産登録地となつた波なみとつくづくブナの原生林遠くかすむところまで、もこともと緑のかたまり

秋田県と青森県の考え方の対立や、増えてくる観光客に対し具体的にどのような対処をして行くか等、白神の今後は大きな課題を抱えていますが、今回の遺産登録が白神の自然にとつても地元住民にとつても有効に働くことを願つて、今後の動向をじっくり見守るうと思ひます。

こんな現状から、秋田県側としては、何としてもこの地域を大事に守つて行かなくてはならないという意識が強く入山禁止という方策が取られ、今まで山菜採りなどでこの地域を利用していた住民などの間でも、入山自粛の合意が大筋で得られています。一方、青森県側では、この入山禁止の方策には反発があり、両者の間で、さまざま対立が出てきています。

私自身は、動植物が最優先され、人間は外から眺めるだけというあり方の場所もあるべきだと思いつつ、政策的にそのような場所を確保するという考え方には、ぜひ成功させてほしいと思っています。ただし、地元住民のかかわり方は、一般観光客とは別枠で慎重に考えて行く必要があると感じています。今回、すばらしいなと感じたのは、秋田県側の地元住民が、自分たちの利益をけずつても、入山禁止という方策に協力しようという意識がでまき上がつてきていることです。法的な規制よりも前に、自主的な意識変革が行われてきたことが、本当に価値のあることだと思います。これは、遺産登録地の話も何もないころから、10年以上の歳月をかけて行われてきた地道な地元の自然保護運動の成果だと思います。

秋田県と青森県の現状から、この地域一帯に広がっていたブナの原生林は、秋田県ではほぼ皆伐状態で、わずかに残つたのが遺産登録地であり、青森県はその点で、まだ手をつけていない地域が広大にあるという現状を、象徴的に表す風景でした。

このような山々がつづきます。そして後ろを振り返ると、皆伐された裸の山。そこはある境界線から急にまた緑の山に戻ります。この境界線が青森県と秋田県の県境です。かつて、この地域一帯に広がっていたブナの原生林は、秋田県ではほぼ皆伐状態で、わずかに残つたのが遺産登録地であり、青森県はその点で、まだ手をつけていない地域が広大にあるという現状を、象徴的に表す風景でした。

満喫させて貰つた尾瀬

「夏の思い出」は四年前急逝した中学校音楽教師をしていました長女の愛唱歌です。

「サラリ」には、昭和三〇年代のゴミだらけの尾瀬の写真が出ていましたが、一〇年かかつて

ました。
大村先生、格別のご配慮を
いただき、ありがとうございます
ました。大切に使わせていた
だきます。

蛭田和成（栃木県） 山本誠
剛（群馬県） 山口竹市（埼玉県） 奥貫真知子（東京都）

たむしば

ついていることは夫に「サライ」の購読を勧められ、尾瀬について少しの知識を得ることができました。

さらにこのたびは岸(好人)・高橋(喬)両先生のご指導のもと、尾瀬についていろいろ教わることことができ、この上ない至福でした。

今のようなきれいな温泉が害現したことが掲載されていますが、心ない人が温泉に入つて傷めた場所を説明して頂き、義務を禁じえませんでした。

左記の方々からカンパをいたしました。厚くお礼申し上げます。(敬称略)
湯浅高行 三島カツ 星壇
福島弥兵衛 藤尾節子 捏
米義徳 斎藤博史 当間き
くい 山本誠剛

■ 年会費振り込み先

年会費(三千円)ならびに
入会金のお支払いは、左記へ
お願いします。

郵便振替口座
00160-4-138023

売り上げの一部が自然保護団体の活動資金となる画期的な「ダイエーエコロジーカード」(写真)が発売されてから二年になる。現在、全国で約四百人がカードを所持し、当会へは昨年、約八十万円が補助された。ダイエー系の店が近くになくとも、VISAカードとして国内、海外で使えるので、ぜひ一枚は所持したいもの。

それに一日間、天候にも恵まれ、長距離をリュック姿で歩いた(夫や娘婿に荷を持って貰っての山歩きはします)ことのない私が、途中で足がつってご迷惑をおかけしましたが、とにかく

またテレビや写真での見知りの平野紀子様にスナップ写真をご一緒にいただき記念になりました。

会費のお問い合わせは
〒373 太田市由良一四七五ノ九
町田恵子まで

憧れの「水芭蕉」は大きな葉だけになつていました。二ツコウキスゲ・オオウバユリ・ヤグルマソウ

帰宅して早速、長女の婚家の
仏壇にこのことを報告に行って
きたことでした。

憧れの「水芭蕉」は大きくなりました。二ヶ所ウソだけになつて、大きさが大きくなつたのです。二ヶ所ウソだけになつて、大きさが大きくなつたのです。

大村氏から20万円

6)からこのほど「老齢で何もお手伝いできないので」と本会に20万円のカンパが届き

〒263
千葉市若葉区高根町
934-14 高橋喬

尾瀬についての情報を寄せてくれる人、会の活動に参加してレポートしてくれる人を求めて います。できれば写真付きの記事を一行13字で書いて、どしどしご送ってください。

便箋などに書かれると、字数の計算ができずにリライトせざるをえず、非常に手間がかかるのです。

◆この号には研修会や入山指導などのレポートが多く集まり、会報らしくなったと自負しています。寄稿された皆さんに感謝しています。できれば原稿用紙に書いてください。

地殻温暖化などここに至る環境悪化は、人間も自然の生態系の一員という当然のことを見失してしまったためにほかなりません。

◆今年の夏は例年になく干ばつ型の気圧配置が続きました。尾瀬の湿原も水不足で、一段と乾燥化が進んできました。